短歌部門　講評

審査委員：歌人　黒瀬珂瀾

今回より選考委員が増え、作品に対してより多角的な検討を加えることができるようになりました。そこで、他の委員より様々な読解をお聞きするにつけ、私個人が改めて認識し直したことがひとつあります。それは、現在の高校生の皆さんが多様な文化やメディアに囲まれ、それを鋭敏に摂取しているのだ、という事実でした。

こういう言い方をするのがふさわしいのかはわかりませんが、皆さんは豊かな実力を秘めている。そして、自分を信じて前を一生懸命に向いている。つまり、とても勉強熱心です。しかしです。勉強熱心であるがゆえに、最初の最初に心に抱いた不安やためらいや不信を、勉強の過程で無理に矯正してしまっていないか。自らを取り巻くメディアや情報などに、自ら自身を最適化させていないか。

短歌を詠むこととは、社会に最適化される以前の私、すなわち、「原初の私」の眼で世界を見つめることです。私が見つめた、私ひとりの世界を、歌に刻印してゆく。それが、あなたの生の刻印となってゆくのです。

そのためにはどうしたらいいか。話が矛盾するようですが、メディアに向き合うためには、メディアをしっかり見つめることが必要です。具体例を挙げれば、新聞を読む習慣をつける、というのも効果的でしょう。ネットで興味のある話題だけを追いかけるのではなく、世界の方から様々に飛び込んで来る情報を見わたしてみる。新聞には、自身の予期せぬ情報が揃っています。それらの情報を見わたすことで、逆に、情報に振り回されない「私」が育ってゆくのです。

この超然文学賞は、文学賞としての役割のみならず、金沢大学の入試制度の一環という役割もあります。ですから傾向と対策を講ずるのも間違いとは言えません。しかし、そうやって、過去の受賞作の傾向を計算して、そこに合わせて作られた作品は、選考のいいところまでは行くとしても、最後の決め手に欠けるきらいがあります。やはり、自身の解釈で出した最適解による歌よりも、原初の私の歌にこそ、最後の関門を突破するパワーがある。自らの中の不安やためらいや不信を大切にして、そして世界に向き合ってください。

その意味で今回、作品「青水無月」により最優秀賞を受賞された渡邉美愛さんは、自らの道を突き進んだ結果を手にされたと言えるでしょう。一首目の「くびすじにアクエリアスを押し当てて慟哭が引くまでを黙せり」、下句の「慟哭」「黙せり」などの硬質でやや演出過剰にも思える言葉をここで選ぶ力に、作者のその瞬間の嘆きの鋭さを見るのです。自分の心情に忠実に、わがままに言葉を選んだ結果が、この一首を歌として屹立させています。「盲信のかすかに灯る漏斗胸　プールサイドの影濡れている」にも注目しました。「漏斗胸」ということを詠うのは大変に難しいことです。この胸が自分の胸か他人の胸か、それは判りませんが、しかし、プールサイドでなにかの「盲信」を察知した一瞬の景を、正直に描いたものでしょう。そこに作者のなんらかの計らいは感じられません。「少し日に焼けた貴方が海ぶどうの目をして語る離散数学」の「貴方」は、徹底した他者としてこの歌に存在します。作者にとってはるかな概

念である「離散数学」とともに訪れてくる他者を、そのまま受け止めたことで、詩情が立ちあがっています。渡邉さんの世界を見つめる姿勢を思うのです。前回の優秀賞受賞の際、「次は最優秀賞を取ります」と宣言した通り、有言実行の受賞となりました。それもすべて、己の思う〈歌〉だけを無心に紡いだ結果だと思います。おめでとうございました。

優秀賞には中牟田琉那さんの「真水の気配」。もうすでに、現代短歌の骨法を身に着けている作者です。「わたしだけきょうだいがいて噴水のそばの空気は常にふるえる」という一首目から、その卓越した感受性と観察眼がうかがわれます。噴水の水の震えを空気の中に感じ取る、というのは、実際に物理的な振動を感知しているわけではなく、己の不安な心情を世界に託したものでしょう。自分が一人っ子であるという事実がある瞬間に、急に自分を深くえぐってきた。その感覚が世界から震えを感じ取っているのです。「遠目なら臓器を売っているような桃のセールの一員になる」も、作者ならではの世界の見方が如実に表れていて好ましいです。中牟田さんはこのまま、自らの感性を信じつつ、多くの先人の書を閲して学んでいってほしく思います。

もう一人の優秀賞は「天井の骨」の服部亮汰さん。どこかコミカルでどこか反骨精神のある文体が印象的です。二首目「黙食―ゥの「ゥ」の偉そうな先生へ　今笑ったなタコさんウィンナー」のディティールに思わず笑いが零れますが、ここにある感情はなかなか複雑です。時代や学校の体制に対する微かな不信が、饒舌な表現の中に覆い隠されているのでしょう。「【手作り】の派手なシールのノリ弁の海苔がのんどに張り付いて冬」の洒脱なリズムに眼を引かれつつ、食品流通システムに対して少し皮肉を呈する。何をどうしたら手作りと定義されるのかは分からないけれど、「手作り」が商売のアピールになる現代。この派手なシールはいつか、海苔が喉をふさぐように、社会の息を止めるかもしれない。次回もぜひ応募を期待したいです。

佳作から気になった歌を。大久保友喜さんの「小旅行」より、「絵馬に刻まれた願いを読んでいくような暮らしを送っていたい」。微妙に現実感、当事者感から遊離した自身の生活感覚を描いているのでしょう。人生は小さな旅行であるという少々ニヒルな観点から、生活の哀感を描いた作品でした。小野愛加さんの「私と依存」より、「トイレから戻ってくれば大国に併合された私の机」。他の級友たちが自分の机を占領してダベっていた、という景でしょうか。比喩の自在さが目を引きます。鬱屈と喜びがない交ぜとなった高校生活の日常をヴィヴィッドに描いた一連でした。鈴木哲平さんの「生まれ落とされて」より「ミルフィーユの下の苺が泣いている父が隠した寺山修司」。上句と下句のアナロジーが巧みで、父の一面を見た息子の微妙な感覚がよく出ています。アンニュイさと大胆さを併せ持って見つめた生活が印象的な作でした。

今回も多くの意欲作に出会えてうれしく思いました。次回もどうかみなさん、ご健闘ください。また、この賞をひとつの機縁として、受賞者、応募者同士での交流が生まれても面白いと思います。